

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	1月に職員で理念を考え変更し、共有している。	開設して6年が経過し、もっと分かりやすい理念を作ったほうがいいのか、との職員意見があり、書面で全職員から意見をもらい「寄り添う心」を新たな理念として掲げている。利用者はもちろんのこと、職員にとっても働きやすい環境であることが大切と管理者は考えている。職員は日々の業務の中で利用者一人ひとりに寄り添う心を大切にして、チームケアを実践している。理念は職員の聞き取り調査からも全職員に周知されていた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	最近はコロナの対応できていないが、以前は地域の避難訓練などに参加、保育園や小学校に慰問に来てもらったりしていた。	感染予防の観点から行事が中止になり、事業所と地域との交流がほとんど行えていない状況にある。コロナ禍以前は、地域のお祭りに子供神輿が事業所に立ち寄ったり、公民館で行われた作品展を見に利用者と出かけていた。併設の小規模多機能ホームとの交流も現在行われていないが、感染状況を見ながら合同行事や地域交流を再開して行きたいと考えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在はコロナの対応がありできていないが、以前はラン伴への参加、オレンジカフェの開催などしていた。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	取組の報告は行っているが、地域の方からの意見はなかなかでない	感染予防の観点から2ヶ月に1回書面開催とし、関係機関へ資料を送付している。コロナ禍以前の対面会議では、事故内容や避難訓練等についての意見や質問が多数聞かれていた。現在は資料の中に「意見があればご記入ください」の用紙を入れ返信封筒を添えて送付しているが、意見がなかなかもらえない状況である。	現在、会議は書面での報告となっており、書面では伝わりにくいところもある。今後は、事業所の取り組みをより理解してもらえるよう、会議資料の内容(事故報告や具体的取り組み等)を検討し、参加者より質問や意見の行き来のある双方向的な会議となる工夫が望まれる。また、会議録は事業所玄関で閲覧できるようにしているが、家族面会に制限があるため、会議内容の報告方法についても検討を期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	何かあった時の連絡や相談は行っており、協力関係は築けていると思う	現在コロナワクチン接種の相談を行うことが多くなっているが、事故報告や介護保険の相談など、市の担当者とは日頃から連絡を密に取っている。市からのメール案内で事業所に関連する研修に職員が参加するなど、日頃から協力体制は築けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に身体拘束の研修を行い、職員にも周知している。玄関の施錠は夜間以外は行っていない。	以前までは本部の有料老人ホームにて集合研修を行っていたが、現在は感染予防の観点から、全て書面での研修となっている。共通事例を職員が個々に検討し、研修終了後には感想等を書面で提出している。現在一名センサーマットを使用している方がおられるが、定期的に検証することで常時使用は行っていない。職員は身体拘束の具体的な行為を理解し、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入職時、定期的な研修を行っている。	高齢者虐待研修を年1回実施している。研修委員会が中心となり、現在は事例検討を個々で行い、書面での研修となっている。職員の疲労やストレスに対し、メンタルヘルス研修を予定している。また、管理者が職員と個人面談をする機会があり、何でも言いやすい雰囲気作りを行い、働きやすい職場環境を整え、虐待を未然に防止する対策をとっている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	定期的に研修を行っているが、制度などについては理解できていない職員もいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には時間をかけて説明し、利用者や家族の疑問や不安な点はよく確認している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には定期的に意見を聞くようにしているが、家族には外部評価の際にしか意見や要望を聞けていない。出た意見は運営に反映させている。	感染予防の観点から現在面会制限を行っている。利用者からの要望や意見等は、日々の関わりの中で聞いている。家族には、受診の際、電話連絡、ラインアプリ等、活用した面会などで意見、要望を聞くようにしている。今回の外部評価での家族の意見についても職員間で共有し運営に反映するよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月ミーティングを行い話す機会を作っているが、なかなか反映できていない部分もあると思う	現在感染予防の観点から、ミーティングは個別の利用者の話し合いが多く、短時間での開催となっている。職員からの意見は、管理者が取りまとめ、物品購入等は、管理者会議を経て上長の決済をもらい購入している。管理者をはじめ職員間でも相談しやすい雰囲気があり、働きやすい職場作りを心がけている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	面談なども行い、職員と話す機会をつくっている。やってみたいことや、研修などに参加してもらい、やる気につなげていっている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内研修は多くあるが、外部研修にはなかなか行けていないので、外部の研修に出る機会を多く作っていくようにしたい		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者と交流する機会は持っていない。管理者は市が開催する交流会に参加している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居の際に本人や家族から今までの暮らしや、好きな事、嫌いな事などを聞き取り、施設で安心して生活できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約の際に不安な事、要望などを聞き、関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	なかなか他のサービスの利用の支援はできていない。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご自分でできる事はやっていただくことを利用者、家族に話している。食事作りやたたみ物などを職員と一緒に行うようにし、職員も過剰な介護をしないよう心掛けている。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	定期的な受診は家族に行って頂いたり、衣替えなども行って頂いたり、面会の機会などつくっていただいている。	ラインアプリを利用したビデオ電話を行ったり、月1回居室担当から笑顔あふれる写真付きの手紙を家族へ送っている。家族からも手紙やお花の定期便が届く方もおられる。コロナ禍のため受診は事業所職員が対応する方が多くなっているが、受診の帰りに自宅に立ち寄ったり、家族と病院で待ち合わせで面会の機会を持つなど、家族との関係が途切れないよう、職員は工夫をしながら共に支えていく関係を築いている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居しても行きつけの美容室に通って頂いたり、できる限り、入居前と変わらない関係が続けられるようにしている	近所の方や同じ建物内の小規模多機能ホームを利用している知人と交流していたが、感染拡大により難しい状況である。職員は利用者が楽しめるよう、海や公園へドライブに出かけたり、事業所周辺を散歩し、地域の誰もが知っている馴染みの八石山を眺めるなど、できるだけ地域と馴染みのある場所を大切に日々の支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	状況に応じてホールの席替えや、職員が間に入り会話の橋渡しなど行っている。入居者同士の声掛けや介助をしている際はそばで見守るなどしている		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院して退去となることが多いが、退去後も必要時にはカンファレンスに参加したりなどして、退去後もサポートやアドバイスするようにしている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	なかなか本人の思いを聞けていない。話を聞けない人は、職員間でどのようにすることが本人の為か、本人が希望していることは、などは話合っている。	介護計画の作成時や変更時には、暮らしの希望や意向の確認を行っている。また、日常の関わりの中でも、入浴時や個別に関わる際に意向を聞いている。コミュニケーションが難しい利用者には、本人の好きなワードや表情から何を望んでいるか、居室担当と話し合い、工夫をしながら意向の把握に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に家族に話を聞いたり、本人にも話を聞いたりし把握に努めている。	入居契約時に家族が事業所に来所し、本人の好きなこと、生活の中でできることを管理者が家族と面談して情報収集している。同じ建物内の小規模多機能ホームからグループホームに入居の方が多く、顔馴染みの関係の中で情報の共有が図られている。アセスメントの項目内容は基本情報の項目が多く、馴染みの暮らし方や生活環境等の情報把握は整理されていない状況であり、管理者はこれからセンター方式のアセスメントシートを活用していきたいと考えている。	入居にあたり、自宅で生活していた環境とはかなりの違いがみられる。本人がどのように生活してきたか、一人ひとりのこれまでの暮らし、歴史、入居までの背景等を知ることの重要性を理解し、本人をはじめ家族の力を借りながら継続的に取り組む姿勢が必要となる。今後は入居前に得た情報と入居後に得た情報をシートに記載し、より介護計画に反映させていくことを期待したい。
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の申し送りや、毎月のミーティングなどで状況の把握に努めている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のミーティングで利用者の課題や問題点などについては話し合いを行えているが、ご家族との話し合いは、プラン変更時などにしか行えていなく、現場職員も参加しての家族との話し合いの場などをつくっていただければいいと思う	入居前の事前調査にて情報シートを基に、介護計画書の作成を行っている。管理者が計画書作成担当者となっており、家族に現在の様子を伝えながら意向の確認を行っている。居室担当者は毎月のモニタリングを実施し、6ヶ月ごとに管理者が見直しを行っている。介護計画書には、本人、家族の言葉をそのまま記載し、現状に即した介護計画書になるよう取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は毎日の記録以外できていない。情報共有は毎月のミーティングで行えている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	病院受診を施設で行ったり、柔軟な対応ができるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の把握や協働はあまり行えていない		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけは変えずに、入居前から通っているなじみの医者継続して診てもらっている。状態に合わせて本人、家族と相談し、必要な病院の相談なども行っている。	入居前からのかかりつけ医継続を基本としているが、家族の状況に合わせて事業所の協力医(毎月往診あり)への変更についても選択できることを説明している。コロナ禍のため受診は主に職員が同行し、家族へは受診結果をラインアプリ等を活用して報告している。専門医への受診時は柏崎市独自のシートを使用して事業所での生活の様子を伝えるなど、かかりつけ医と関係を築きながら、適切な医療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設に看護師はいないが、併設の小多機に來ている看護師に相談したり、気になる事があると、病院に確認の電話をしたり、病院の看護師とも連携を図るようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院に情報提供を行い、入院時も定期的に状態の確認、退院時には病院の相談員との面談などを行い関係づくりを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に施設でできる事、できない事の説明は行っているが、週末期に向けた話し合いなどはできていない。今の状態だと、終末期をひなたで過ごすのは難しく、今後どうするかは課題だと思う。	利用者や家族には重度化した場合や終末期の在り方について、入居時に事業所としてできないことを説明した上で意向を確認している。入居後も利用者の状態に変化があった場合には、医師の判断等を踏まえながら話し合いを重ね、必要な支援を行っている。また、要介護3になった段階で特別養護老人ホームへの入所申請の確認も行っている。これまでに看取りを行ったケースはないが、今後は看取り希望に対応していきたいと考えており、体制整備を検討しているところである。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ミーティングなどの際に急変時や事故発生時の対応の話はするが、実際訓練などは行っていない。	マニュアルや緊急フローチャートが整備され、いつでも確認できるようになっている。AEDも玄関に設置されており、全職員が消防署主催の普通救命講習を受講している。日中は何かあれば併設施設の看護師が対応できる体制がある。	コロナ禍で研修が難しい状況であるが、緊急時の対応では慌てず適切な対応が求められる。現在の利用者の身体状態から考えられるリスクについて職員の意見を聞いた上で、実際に起こり得る事態を想定した内容を取り入れた実践的な研修を積み重ねていくことが望まれる。
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の防災訓練に参加し、施設でも年に2回、避難訓練を実施している。連絡網にも消防団の連絡先や、入居者の居室の入り口に写真と名前が書いてあるトリアージをぶら下げて分かるようにしている	夜間想定も含めて年2回の避難訓練を行っている。また、鯖石地区の防災訓練へも利用者と職員が参加し、地域との連携が図られている。有事の際は法人の近隣職員が協力員としてかけつける体制もできている。利用者個々の居室入り口には、災害時スムーズに避難が行えることを目的としたトリアージ(利用者の写真と名前を明記したタグ)が掛けられている。食料や備蓄品も準備し敷地内にある倉庫内で管理している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄の声掛けの時など、他の方に聞こえるように言ってしまう時もある。	管理者は日頃の言葉かけや支援方法など、ケアの場面ごとに気になることがあれば職員へ助言しており、ミーティングの中でも不適切ケアについて話し合っている。入浴は基本一人ずつ行い、排せつ時の声掛けやタイミングなど羞恥心に配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人が自己決定できるような声掛けを心掛け実践している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員のペースでしてしまうこともあるが、一人ひとりのペースで過ごしていただけるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴の際には一緒に衣類を選んだりし、その人らしい身だしなみができるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	パンを用意したり、好みに合わせた食事ができるように心がけている。下膳やお茶汲みなど一緒に行っている。	食材の仕入れは委託業者を利用し献立も決まっているが、毎月選択できるお楽しみメニューがあり、嗜好に合わせ代替えメニューも可能である。調味料類やお菓子などは利用者と買い物に出かけていたが、現在コロナ禍のため職員が対応している。利用者と一緒におはぎを作ったり、畑やプランターで育てた野菜を調理するなど、食事が楽しめるよう工夫している。利用者は下ごしらえや片付けなど一人ひとりのできることを一緒に行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は栄養バランスが取れていると思う。水分はお茶だけではなく、スポーツドリンクなども用意し、その時に合わせて飲んでいただけようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	声掛けや介助を行い、口腔内の清潔保持に努めている。義歯の洗浄、消毒も行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の声掛けも定期的のものになってしまっていたり、本人の力をいけず支援は行えていないように思う。	利用者個々の排泄間隔やタイミングを把握してさりげない声掛けや誘導を行っている。状態にあった排せつ用品を使用する、希望に応じて夜間のみおむつを着用する、ポータブルトイレを準備するなど、利用者個々の意向を尊重しながら、自立に向けた排せつ支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝起きてから冷たい水を飲んでもらったり、水分を多く摂ってもらったりの対応はしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日や時間帯は決めているが、決まった曜日の日ではなくても入浴できるようにしている。	基本的に週2回以上、午前・午後に入浴時間を設け同性介助の希望にも応じており、毎日入浴や夜間入浴も可能である。入浴拒否があった場合は無理強いせず、タイミングを検討し気持ちよく入浴できるよう支援している。入浴剤は3種類準備して好みの香りを選んでもらい、職員がマンツーマンで衣服を選ぶところから会話を楽しみながら対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	状態に応じて休息の声掛けをしたりし支援できていると思う		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬説明書をファイルに閉じて、職員がいつでも確認できるようにしている。内服の変更があったら職員に周知し、数日は服薬による変化がないか気を付けている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人に合わせた楽しみ事の支援は行っていないと思う		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今はコロナもあって受診以外の外出は難しいが、以前は衣類と一緒に買い物に行ったり、目の前のセブンにおやつを買いに行ったりしていた。	コロナ禍で外出の機会が少なくなっているが、天候の良い日には事業所周辺を散歩したり、海岸方面や夢の森公園、赤坂山公園へのドライブなど、少人数で感染対策を講じながら出かけている。また、受診の帰りに自宅へ立ち寄り愛犬と触れ合うなど、家族の協力を得ながら可能なかぎり利用者の要望に応えられるよう努めている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭を持っている方はいられるが、それを使って買い物をするなどはできていない。家族が管理されて持っていない方も多い		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話はご本人がしたいと言われた時はしていただいている。懸賞など出す方がいられるので、はがきを出したりなどの援助はしている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ユニット内を季節に合わせて飾りなどづくり飾っている。エアコンの風が直接あたってしまふことがあるので気を付けている。	利用者が集うリビングの窓からは柔らかな日差しが差し込み明るく清潔感がある。壁面には利用者と職員とで手作りした季節の作品を飾り、居心地よい空間づくりが行われている。また、組み合わせ方自由自在の六角テーブルが設置され、利用者同士の自然な距離感が和やかな雰囲気を作り出している。対面キッチンの美味しそうな匂いの中で利用者と職員は会話を楽しみながら食事の準備を行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有空間で一人になるスペースの確保はできていない。気の合った方で二人でソファに座って話すなどはできている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は家で使い慣れたものなどを持ってきていただくようにし、入居時にベッドの配置なども本人、家族と相談して決めている。	それぞれの居室には、自宅からタンスやテーブル、寝具や仏壇など、使い慣れたものや馴染みのものを持参してもらっている。家具の配置はその人の好みに合わせ居心地よく過ごせる環境づくりに努めている。居室の掃除は利用者のできる力を大切にしながら職員は必要な支援を行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の電気の付け方が分かりにくいなど、利用者さんにとって難しい作りになっているところがある		